様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ２４ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１４３２１

研究課題名（和文）ナラティブ・アプローチによる土木技術者のリーダーシップ学習教材の開発

研究課題名（英文）Development of learning material on the civil engineer's leadership by narrative approach

研究代表者
松村　暢彦（MATSUMURA, NOBUHIKO）

愛媛大学・社会共創学部・教授

研究者番号：８０２７３５９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：土木技術者のリーダーシップ開発の社会的必要性は高いにも関わらず、理論的、実践的研究が行われていない。そこで社会科学、土木計画学分野で着目されつつある、ナラティブ・アプローチを適用し、土木技術者のリーダーシップを解明したうえで、リーダーシップ学習プログラムを開発した。土木技術者が関わったプロジェクトに関する経験をヒアリングを重ねて収集した。それらの収集したナラティブをもとにギリガンの理論に基づいてリーダーシップの発達プロセスを明らかにした。本研究では特に女性の土木技術者、まちづくり人材に着目する。

研究成果の概要（英文）：This paper aims to figure out the process of mature while maintaining and forming relationships with others based on Gilligan's care ethics, focusing on the role of mothers, the role of entrepreneurs, their own distinctions, by interviewing 20 entrepreneurs who are parenting mothers. In addition, the elements of ‘can’,‘should’ and ‘will’ were applied to the maturation process to classify, and the each tendency was examined. In the formation of an asymmetric relationship with others through the role of entrepreneurs, they can find themselves as others of others. And they realize that respecting their feelings will have a positive impact on their family through their mother's role. Conflicts arise in the allocation of time to each role, but it seems that it is possible to seek out which choices can be satisfied and decide, while considering the magnitude of the influence on each, within the structure of complex influences.

研究分野：土木計画

キーワード：ナラティブ・アプローチ　リーダーシップ　土木技術者　インタビュー

１．研究開始当初の背景

土木技術者に対する教育に関しては、1999年にJABEEによる技術者教育プログラムの審査、認定制度が始まって以降、技術者倫理の科目設計や実践報告が増えた。研究としては、倫理規定の解釈可能性に着目して現行規定の問題点を検証した研究（羽鳥ら（2009））、土木技術者が身に付けるべき資質と能力と人的ネットワークとの関係を明らかにした研究（松村ら（2011））がある。しかし、土木学会初代会長 古市公威が「将ニ将タル人ヲ要スル場合ハ土木ニ於テ最多トス」と語ったように土木技術者のリーダーシップ開発の必要性は強いものの学術研究はなされていない。

一方、リーダーシップ研究は主に経営学で検討され、リーダーの特性理論から行動理論、リーダーの置かれる状況に応じてリーダーシップが変化するという状況理論に変遷してきた。その後、変革型リーダーシップやカリスマ的リーダーシップのような特性理論的研究の回帰やサーバント・リーダーシップのようなリーダーとフォロワーとの関係性の意味づけを転換しようとする内省的な研究が取り組まれている。近年のこのような動向の背景には、社会科学全般において過度な定量的研究動向に対する反省から定性的研究の再考が行われていることがある。なかでも社会構成主義の立場から、ナラティブ（物語）に着目した研究アプローチが注目されている。

ナラティブ・アプローチは、ナラティブの構造的特性を究明する解釈的アプローチとナラティブそのものが有する機能的側面を究明する機能的アプローチに分類される。土木計画の分野においても、藤井がナラティブ・アプローチの公共政策的意義を論じて以降、研究事例が増えつつある。解釈的アプローチとしては、交通まちづくりの描写研究、新聞社説の論調を対象とした研究、行政職員の土木事業に関わる物語描写研究がある。機能的アプローチとしては、地域の物語の継承と地域愛着の形成に関する研究、合意形成への適用に関する理論的研究、プロジェクトの物語共有による地域愛着の形成などがある。このように、土木計画学においてもナラティブ・アプローチの公共政策への適用に関して学術的発展と実践的研究が期待されている。

２．研究の目的

本研究では、リーダーシップ開発に関する定性的研究の一手法として、ナラティブを鍵概念に据えた研究方法をナラティブ・アプローチと呼ぶ。多様な職種の土木技術者に対して自分が関わってきたプロジェクトに関するナラティブを収集し、土木技術者のリーダーシップモデルを明らかにする。本研究では特に女性の土木技術者、まちづくり人材に着目する。

３．研究の方法

リーダーシップ研究の知見から土木技術者のリーダーシップの開発の課題とナラティブ・アプローチの有効性を整理した上で、多様な職種の土木技術者に対して自分が関わったプロジェクトに関するナラティブを収集し、ナラティブ・アプローチを用いてリーダーシップの発達プロセスを明らかにする。

４．研究成果

(1)人間性発達理論－リーダーシップ－

ケアの倫理は、1982 年に C.ギリガンによって提唱された道徳性の発達についての理論である。当時コールバーグが提唱していた道徳性理論は、行為者を男性に限定したものであったため、その枠組みだけで発達を論じることの問題性を指摘した。特に女性を含めた検討を行い、それまで明らかにされてこなかった「もうひとつの声」としてケアの倫理を提唱した。複数の道徳原則や規則の対立・葛藤をはらむジレンマを題材に男女の道徳的思考の違いを検討し、また女性が道徳的に葛藤を抱くことになる中絶に注目してインタビューを行い、道徳性の発達段階について検討した。サンプル数は多くはないものの、丁寧に詳細まで検討を行っている。

コールバーグの提唱した道徳性は「公正さの道徳性」であり、どの人に対してもどんな状況でも正しいこと、公正であることが目指される。それに対してケアの倫理に基づく道徳性では、他者への共感や関係性に基づく判断がなされ、自分とつながりをもつ他者に配慮して他者を傷つけないことが考慮される。抽象的な原則ではなく、個々の状況で一人一人を具体的に尊重し、配慮される必要性に応答する責任を果たす道徳性である（山岸，2010，p.450）。なお、ギリガンによる原著で使用されている「care」を、岩男他（1986）により日本語に翻訳される際に「思いやり」の言葉が充てられ使用されている。

ケアの倫理では、道徳性の発達を 3 段階とその間の移行に分けて整理している（ギリガン，1986，pp.129-130）。第一段階は、他人の保護と指示のもと生活するような状況が想定され、自分が生きるために自己中心的な態度を取り、また選択肢がないため責任も取らない。しかしそのうち、自分の存在は他者に受け入れられてこそのものであると気づき、より他者を意識し、少しずつ自身を社会化していく。第二段階では、社会が一般に女性に求める「女性らしさの慣習」に従い、他人の要求に応え行動しようとするようになる。しかしその態度は、他人のために自己を犠牲にすることにつながり、他人と自分とを不平等に扱うという不合理さに直面し、人間関係を見直す必要に迫られる。この移行段階では、他者への思いやりを重視しながらも、自分の気持ちに対しても誠実になっていき、自分も他人も傷つけないような道徳律を模

索することになる（ギリガン, 1986, p.164）。第三段階では、自己と他人は互いに依存関係にあると認識するようになる。他人のために自己を犠牲にするのではなく、まわりの人間への影響を考慮した上で判断し行動するべきであり、それが自立的な責任ある人間の態度であると考えるようになる。それは他人から自己を「分離」していくプロセスであり、その分離はこれまで恐れていた「孤独」ではないと知ることになる。また正当な「権利」を主張する強さも持つことになる（ギリガン, 1986, p. 249）。

成熟プロセスではこのように、他律的な態度であった人間が、「社会的なかかわりあい」というより広い視野をもって、一人の人間としてより自律的かつ主体的に考えるやり方を身に着けて、社会の中で責任を果たしていけるように変化していく。

（2）プロジェクトを通じた土木技術者の成熟プロセスについて

プロジェクトを通じた各人の成熟プロセスについて、できること（can）、求められていること（should）、やりたいこと（will）の 3 つの要素に当てはめた。エドガー・H・シャイン（2003）によるキャリア形成に関する理論を参考にしたものであるが、理論では 2 つ目の要素が「何をなすべきか（must）」とされているのに対し、ここでは他者との関係性をより重視して should を用いている。can、should、will のいずれかから始まり、他の要素を確立しながら、3 つの要素が揃っていく。3 つが確立するのに前後して、何かの出来事をきっかけとして各要素が縮小・拡大などの変化をする場合がある。この成熟プロセスについて、can に駆動されるタイプを「can 駆動タイプ」、「should に駆動されるタイプを「should 駆動タイプ」、will に駆動されるタイプを「will 駆動タイプ」と名付けた。さらに要素が確立していく中で起こる変化について、「縮小を経験したか・していないか」「直近は拡大傾向であるか・ないか」の二つを軸として分類し、can 駆動タイプでのうち縮小経験がないのは「c-1 型」、縮小経験があり直近の拡大傾向がないのは「c-2 型」、縮小経験があり直近の拡大傾向があるのは「c-2 型」とし、should 駆動タイプ、will 駆動タイプについても同様に分類した。c-1 型が 6 人と最も多く、続いて c-3 型の 5 人、c-2 型の 4 人となっており、can 駆動タイプの合計が 15 である。should 駆動タイプは 2 人、will 駆動タイプは 3 人となっている。

c-1 型について成熟プロセスの解釈を記述する。A さんの場合、家族の生活を支えるために、プロジェクトして懸命に働き続けてきた（第二段階）。出産し、こどもを言い訳にしてやりたいことができないまま老いていくのが嫌だと感じるようになった。子育てにおいてこどもが母親を必要とすると思われる時期を見極めた上で、それまでの乳幼児期は事業を優先して、自分自身のやりたいことにチャレンジしようと決意した。こどもは自分の母に預けて海外に渡航して修行し（移行段階）、帰国してから始めたプロジェクト家としての事業で他者からの手ごたえを感じ、経験を積む中で自分自身が納得する事業が出来上がっていった。事業が安定し、稼ぐというプレッシャーから解放され、自分自身が楽しくプロジェクト家としての事業に取り組めるようになっている。当時思い切って行動したからこそ今があると、肯定的に捉えている（第三段階）。

B さんの場合、結婚しても「嫁」ではなく一人の人間として生きたいと願っていたものの、結婚後は義理の両親と同居し、嫁として、また母として生活しながら働いていた（第二段階）。近所の同じ状況にある母親が、家を出ていってしまったことをきっかけとして、プロジェクト家として「家族の暮らし方」を重視しながら仕事をするようになった。自分自身の子育て経験から、子育てには親以外の大人が関わる方がいいものの、それは家族親族という狭い関係の大人だけでなくコミュニティという広い関係の中で子育てができればよいと考えるようになった（移行段階）。母としての経験を活かし、そしてプロジェクト家としてのスキルも役立てながら、自分自身が重要と考えるコミュニティ活動について、仲間とともに実践している（第三段階）。

C さんの場合、子育てを行う中でその大変さを経験し（第二段階）、ほかの母親たちのために、自分自身ができることがあるのではないかと考えるようになった。それまでは「気軽」な気持ちだったプロジェクト家としての事業を、より真剣に取り組むようになり、事業を通して母親たちが明るい表情になっていくことをやりがいに感じている。母の役割とプロジェクト家の役割は、割り当てる時間についての葛藤を生じさせていたが、こどもの成長につれて解消しつつある（移行段階）。自分のこどもの成長にも役立てることができ、またほかの母親たちの役にも立てられるようなスキルを事業の中で身に着けていくことで、自分自身も充実し、母親としての役割も果たすことができ、プロジェクト家としても意欲的に事業に取り組むことができるという、両立ができている（第三段階）。また、少しずつでも新たな客層を開拓していく必要があるが、教室の受講者が所属する会社での開催をセッティングしてくれたり、イベントへの出店時に企業の人から声を掛けられて別の会場でも実施することになったりと、紹介や依頼により活動の場が広がっている。

D さんの場合、子育てのことを重視し、自宅でできる仕事を選んでプロジェクトした。子育ては特に今しかできないとの思いから重視しているが、家事を求める夫の水準と折

り合わず対立することもある（第二段階）。プロジェクト家として製作に取り組んでいる時間は、自分自身が癒されているように感じており、大変な子育てをしているママたちにも同じように味わってほしいと考えるようになり、子連れで参加できる自宅での教室を重視している（移行段階）。本当ならもっと事業に時間をかけたいところであるが、妻として夫との関係の調和をはかり、なおかつ夫からプロジェクト家として認めてもらうため、生産性を向上し収入を増やすやり方に変更することにしており、一方でママたちに癒しを提供するという自分の考えも尊重してニーズがあれば自宅教室も随時開催するつもりでいる。逆境でも楽しもうと意識しており、同時に事業に取り組む姿を見て、仕事は楽しいものだとこどもに思ってほしいと願っている（第三段階）。

E さんの場合、母として子育て「だけ」をするような「家にこもっている」生活が続き、体調を崩した。回復したあとは、こどもがいても自分自身がやりたいこともするべきだと考えるようになり（第二段階）、癒しを必要としているほかのママに提供するため、プロジェクトして自宅で美容のサロンを始めた。当時は、母でも妻でもない、自分自身が一人の女性として輝きたいと考えていた。プロジェクト家として他者の求めに応えて新たにメニューを追加するうち、「社会を変える手段に出会い」、これを活かして自分自身の手でほかのママたちを幸せにしていきたいと思うようになった（移行段階）。求めに応えきれるか自信がない時もあるが、役に立てるように自分自身として、またプロジェクト家として学びを深めていこうと自分の意思を固く持っている。いまでは、母の役割も引き受けながら、プロジェクト家の役割も、「全部が自分」だと考えている（第三段階）。

F さんの場合、夫がプロジェクトしたため、妻として夫の仕事をサポートした。母として子育ての時間も十分に取れず、また自分自身の健康も損ねてしまうほど忙しい日々を送った（第二段階）。その末に転機が訪れ、自分を犠牲にするのではなく、頼まれてもできないことはできないのだし、「自分の未来」を自分で決めることが重要であると気付き、その後離婚した。後に味噌づくりの技術と出会い、家族の健康を維持するために家庭内で受け継いでいってほしいと考えるようになり、発酵教室をプロジェクト家としてプロデュースするようになった。新たなパートナーとの間にこどもができたので、母として離乳食に発酵を取り入れることにし、ほかの誰かとともに取り組みたいと思い、助産院で離乳食教室を開催した（移行段階）。今度は子育ても大切にしながら、プロジェクト家として女性らしい働き方をしていきたいと考えている（第三段階）。

次に、c-2 型について記述する。

G さんの場合、写真を使ったクラフトを自分が楽しいと感じて、その作品を見た周りの友人である母親たちの声に応えてプロジェクト家として教室を開催するようになった（第二段階）。こどもが小さいうちは母として写真もたくさん撮影していたが、こどもが成長して撮影する機会が減り、それを使ったクラフトへのモチベーションが下がり、自分が楽しくなくなってきた。またママ友たちもこどもが成長するにつれて働きだしたため参加者が減ってきた。このような状況の中、自分は中途半端な状況にあると感じており、今が転機であると受け止めている（移行中）。

H さんの場合、母として子育てをするうちに家族以外との関係性がなくなってしまった時期がある。家計のために勤めたり、こどもの近くで働くためにプロジェクトしたりと、母・妻として家族のために仕事をし、他人からのアドバイスや夫からの言葉をそのまま受け入れて行動に移してきた（第一段階）。パートで働くうちに自分は手芸が好きだのだと気づいた。商品をつくってプロジェクト家として販売し始めた（第二段階）。テレビで見たことをきっかけに、かつて居場所を必要としていた自分やこどもの経験も踏まえて、手芸と関連付けた居場所づくりがしたいと思い立ち、プロジェクト家として自発的に数回開催した。自信はまだ確かではないが、母として、プロジェクト家として、自分として、居場所づくりにも取り組んでいきたいと考えている（移行中）。

I さんの場合、こどもができ会社勤めを辞めて、社会との関係が絶たれ自宅に「閉じ込められてしまった」と感じた。こどもに着せたい服を作るため、ハンドメイドの製作を開始した。家族の協力が得られないため、こどもの世話を自らがやるしかなく、こどもが小さいうちはハンドメイドの製作を断念した期間もあるが、こどもが成長し子育てが落ち着いてくるにつれ隙間時間に製作の時間を確保できるようになった（第二段階）。イベントに出店して客とやりとりをする中で、プロジェクト家としての自分が作るものが求められ喜ばれていることを感じるようになった。SNS などで周囲の女性が「キラキラと輝いている」ように見え焦りがあった時期もあるが、自分の作るものを喜んでくれる人のために丁寧に作ることで誰かと「つながって」いることが重要だと思うようになり、戸惑いがなくなった（移行段階）。これからも自分の感覚を大切にしながらつくり、またこども着せたいと思うような服も作り続けていきたいと考えている（第三段階）。

J さんの場合、子育てや家事はやって当たり前と言われるので、育児だけでは「自分が満たされていない」と感じていた。家計のために働くことになり、資格を活かして起業した。事業が軌道に乗るまでは「誰かに助けてもらいたい」と考えもしたが（第二段階）、「これじゃいけないと思って」誰かに頼るのではなく自分の意志で行動することを決意し、と

もかく定期的に活動を続けることにした。目の前の人に感謝されることをやりがいに感じている。SNS などを通して、ほかのプロジェクト者の行動や実績について簡単に情報が手に入るため、その情報に振り回されそうになることもある（移行段階）。目の前のお客さんを大切にし、すぐに手を差し伸べられる身近な存在でいられることを目標に取り組むことにしている。お母さんが明るいと家の中が明るくなるので、自分の気持ちを大切にしながら前向きに取り組んでいきたいと考えている（第三段階）。

次に、c-3 型について記述する。K さんの場合、プロジェクト家として助産院の運営に取り組んできている。結婚出産し、母として自分の子にしてあげたいことも、プロジェクト家としてほかのママに提供するようになった（第二段階）。プロジェクト家の役割と母の役割の二本柱となり、時間のやり繰りにおいて葛藤が生じてきた。自分自身が起業家としてやりたい事業を思いつき、人手が足りなくて困っていると、院で出産したママたちがスタッフになって支えてくれるようになり、さらにやりたい事業の構想を共有して、その実現のために人材や情報などの資源を紹介してくれるなど、やりたい事業を実現するためにネットワークが広がっていっていると感じている（移行段階）。母として、プロジェクト家として、こどもにとってよりよい未来を創っていくための各種講座などを実施していく予定で、自分の感覚を尊重して取り組んでいくつもりである（第三段階）。

L さんの場合、双子の子育てで大変な経験をしたことと、ママ友とリフレッシュのためにお菓子作りをした際に喜んでもらえたことから、子育てに疲れているママの癒しになればいいと、自宅にてパンづくりの教室を開業した（第二段階）。事業よりも、母として子育てを最も重視すると決めており、できる範囲で教室を続けてきた。ほかにも、ママ友たちと気軽に出店できるマルシェイベントを開催
するなど、自分の事業以外にも、周りの人に必要とされていると思うこと、あったらいいなと思うことに幅広く取り組んできた。事業の将来を考えた時に自分一人で細々と取り組んでいくことに対する限界を感じ、また同時期にプロジェクト家としてマルシェイベントを持続的に運営していくために、ボランティアを脱するための活動組織づくりという課
題を抱えていた。組織づくりというチャレンジには躊躇していたが、仲間の後押しにより決断でき実現に向けて取り組んでいる（移行段階）。プロジェクトに全力で取り組むことで、
母としてこどもたちに「夢がかなう」ということを伝えたいと考えており、それを受けて当初はプロジェクトに対していい受け止め方をしていなかった夫は、母親のプロジェクトがこどもに与えるプラスの影響を認めて態度を前向きなものに変化させている（第三段階）。

M さんの場合、写真を使ったクラフトが好きで、周りに請われて自宅で教えるようになった。他の人としゃえりながら一緒に作ると、ママたちにとってリフレッシュや出会いの場になることが分かった（第二段階）。知り合いばかりが参加するサークル形式では閉鎖的になってきたため、誰でも参加できる教室形式に変更して対象を広げ、イベントにも出店し始めたところ、客からの要望に応える形
で出張による教室も開催するようになり、活動の場も広がっている（移行段階）。看護の知識があることから、クラフトのスキルと組み合わせることで、リハビリや介護に活用できるのではないかと可能性を感じている。社会と関わっているという実感がほしいので、子育てしながら働き続けていきたい（第三段階）。

N さんの場合、こどもに手作りの帽子をかぶせたいという想いから製作を始め、イベントやネットで販売も始めた。こどもが寝ている間でないと製作ができなかったが（第二段階）、保育園に預けることで製作の時間も確保でき、またこどもにとっても友達ができるのでいいことだと感じている。手作り品は手がかかっているにも関わらずネット上ではとても安い価格で販売してしまっているが、「自分の作る商品を求めてくれる人」に買ってほしいと思い、納得のいく値段に設定し、オリジナルのタグをつけるなどして他と一線を画して売るように心がけている（移行段階）。イベントでは、帽子を手に取ったママが笑顔になるのがうれしく、これからもひとつ一つ丁寧に作っていきたいと思っている。身近な人たちからの意見も参考にしながら、自分がこどもにかぶせたいと思うような帽子を作り続けていきたい（第三段階）。

O さんの場合、自分の友達がいない中でさみしさを感じながら子育てをしていた。もともと着物が好きで、長男に着せるために男児用の着物を手作りし始め、販売も始めた。プロジェクト後は販売イベントなどを通して知り合いや友人が増えた（第二段階）。男児用の着物を求めている人のためにオーダーを受け始めたが、注文が増えすぎて「こどもに構えない」状態になりいったん休業した。母の役割を全うするためにも、プロジェクト家として重視すべきものを見つめなおして整理した結果、着物を着る機会づくりなどの活動もしたいと気が付いた。かつてこどもに着物を着せて外出させると「かわいいね」と声をかけてもらった経験から、そういうさみしい状況にいる人に男児着物は提供していきたいとも思っている（移行段階）。今後は、母としてこどものための時間も確保しながら、プロジェクト家として将来こどもを雇える程度の経営を目指し、また他者のリクエス

トに応えながらも自分の気持ちを尊重して取り組んでいきたいと考えている（第三段階）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０　件）

○取得状況（計０　件）

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
松村　暢彦（MATSUMURA, Nobuhiko）
愛媛大学社会共創学部・教授
研究者番号：８０２７３５９８

(2)研究分担者
羽鳥　剛史（HATORI, Tsuyoshi）
愛媛大学社会共創学部・准教授
研究者番号：３０４２２９９２